

## 西川如見講義ノート

### ― 理系人の道徳観とは ―

常吉 幸子

#### 【要旨】

NICE キャンパス長崎のコーディネート科目の一部として、西川如見の『町人囊』を紹介する講義を行った。その際、若干興味を引かれた〈問題点〉があったので、そのことについて少し、考えを展開してみたのがこの論文である。身分制とは何だろう。単に社会的に制度化された〈不公正〉に過ぎないのだろうか。では、その身分制において下位に位置づけられるものは、すべてを奪われ、人間らしく生きることを許されないのか。もちろん、そんなことはない。理念としての身分秩序は、さほど有害ではなく、身分が低いということとそれ自体は、なにひとつ奪わない。社会的不公正は、本質的にはもつと別なところにある、と筆者は結局いいたいのだが、そこまでは本論では言及しなかった。いうまでもなく、それは〈格差論〉に行き着くはずだ。

長崎の誇る知識人にして、近年刊行された『長崎先民伝 注解―長崎の文苑と学芸―』<sup>1</sup>にも載る西川如見。天文・暦学のエキスパートで、将軍家の下問もうけたというが、その天文・暦学は、筆者にとってはほとんど疎い分野である。いうまでもなく、私自身が〈文系〉だからである。彼は、長崎鍛冶屋町の商家の生まれ。二十代で学に志し、天文暦算を好んだ。五十才で家業を長子に譲って隠居、ますます研究に励んだ。享保四年七十二才で徳川吉宗に招かれて、江戸に。天文学について下問をうけた。このことが終わり、しばらく江戸に滞在した後、長崎に帰って間もなくなくなつた、ということになると、これは彼の生涯の「達成」を記念するものとすべきだろう<sup>2</sup>。

そもそも、理系人・文系人とはどのように違うのだろうか。その点については、小谷氏の『理系あるある』を参考にしたらどうだろうか。あまり真面目でも深刻でもないところがいい。そもそも、私自身については、どちらだといえづらいだろうか。文系と理系の間ぐらいといっておけばいいか。学歴からすれば完全に「文系」かもしれないが、亡くなった父も、弟もバリバリの理系人類で、珈琲を飲んだカップに少し紅茶を入れて、濯いで捨て、あらためて紅茶

を注いで飲みながら、「共液洗淨」ともえきせんじょうなんていう、理系ジョークに付き合わされてきたからだ。ただ、私自身は数字は苦手。数学的帰納法以外の数学を、面白いと思った記憶がない。だから、中間型だが文系人間に帰されるといつていいだろうか。文系人類の道徳観というのは、実際どうなのだろう。はつきりいつて、相当インチキ臭いような。どちらかというところ、反道徳的などころがあるかもしれない。

三嶋由紀夫に『不道徳教育講座』などというふざけた題名の著書がある。文系人類は、というところと違うような気がするが、すくなくとも「文学」に関わる限り、悪・不道徳・価値の破壊は、ついで回り、かえつて滝沢馬琴などの〈勧善懲悪〉などのほうが逆に悪評紛々である。ニーチェは『善悪の彼岸』(1885)『道徳の系譜学』(1887)において、既存のキリスト教道徳や、良心の呵責、禁欲主義などの由来を解剖して、その既存道徳を無効にしようとした。すくなくとも近代的「文学」は、道徳と対立しがちである、といえるだろう。しかし、道徳はそのように生きる上で邪魔なものなのだろうか。いや、そうではあるまい。機能不全に陥った古い道徳体系はともかく、たとえば、人を殺さない、騙さない、盗まない、といったもつとも単純

かつ基本的に普遍的、かつ、実際に遍在している道徳規範は、私たちが社会の中でより安全かつ生産的に生きていくためには、必要不可欠なものだということだ。それ無しには私たちは生きていけない。私たち人類が、よりよく生きるためにこそ、その基本的な道徳律は、より洗練されたものとして進化しつつ、平和で安全な世界・社会を築きつつあるのであり、そちらの方がそが、〈人〉の本性なのかもしれない。それがステイブン・ピンカーのいわんとするところだろう。いわば、人の本性はよいものであり、より良くなることによつて社会は洗練され、人という種の繁栄にさらにますます寄与している。なるほど。治安の悪い都市は人が去つていつて滅び、治安の良い都市は、ますます人が集まつてきて繁栄する。人社会の「道徳性」とは、適者生存の〈鉄則〉のもとに、人類をより繁栄させるシステムであり原則である、といったところなのだろう。たとえば、ヒンズー教徒が牛肉を食べないのは、貧しく過酷な古代農村において、いかに飢饉に襲われて家族の餓死に直面したからといつて、耕作を助けてくれる牛を食べること

を容認するならば、何年も連続で、または波状攻撃的に断続して飢饉が襲ううちには、そのコミュニティーが存続で

きなくなるからだ。どんなことがあっても牛を殺して食べたり絶対にはしない、そういう戒律をもつ村だけが、そのような環境で生き残ることが出来たのだという<sup>4</sup>。

そういう現実的な〈道徳〉が、先述のように、そうそう文系か理系かによって分裂しては困る。社会は一つなのだから。先掲の、文系道徳が〈悪のススメ〉めいて見える理由は、賢みなみなさんとはとくにおわかりのように、〈自己愛〉を禁じるような、単に人々を不幸にする〈道徳〉を破壊しようとしたからだし、それだけなのではないか。〈偽善〉を嫌う近代に典型的な神経症的メンタリティーや、〈良心の呵責〉の如き、残虐で人を不幸にするものが気に入らないだけの、むしろ、健全さを志向する現実的な道徳観に、潔癖にこだわっていただけかもしれないではないか。

このような、問題性の状況の中で、ひとつの理系人類の〈道徳観〉の一例として、この西川如見の『町人囊箱』(元禄五年刊)を観察してみたい、そのような興味を持った、ということから、NICEキャンパスコーディネーター科目「長崎を知る」の一コマを担当し、講義してみたと思ったわけなのだ。如見ほどの程度ちゃんと〈理系〉だったのか。

この、貝原益軒の啓蒙書と同じ「柳枝軒茨木多左衛門<sup>5</sup>」から出された、一般向けの著書に、どのようなイデオロギ―的傾向や、思考の傾向を見ることが出来るのだろうか。

序文を見ると、

聞たことは聞捨とやらんなれども、たましく籠耳の底に留りしを、たゞに捨置なんも本意なくて、かつぐくかきあつめ侍りぬ。

と、語り始める。

「家童子にあたへて、昼<sup>伏</sup>ふしの眠冷ましにもがな、何もかも取り込んでおく」乞食袋。何もかも取り込んでしまつて、選び用いるちからもなく、袋の底でかび臭くなつてしまったものを、ともいう。「分別囊のひとつへ底抜けやすき」  
「笑ひぐさ」「かわゆきわざになむ」……。

『徒然草』流の謙辞と見るべきであろう。世の人々からきいたことをそのまま記す、という著作方針を述べているわけで、この後に続く本編は、悉く「聞き集め」を語るという姿勢で貫かれている。しかし、この情報源のいくらか

は、西川如見自身かもしれず、また、選択し編集したのは間違はなく彼自身である。とすれば、その内容・配列に如見自身の思想・思考を見出そうとするのも、無理ではないだろう。冒頭の第一段は次のような内容である。

或人の云、「町人に生れて其みちを楽しまんと思はゞ、まづ町人の品位をわきまへ、町人の町人たる理を知てのち、其心を正し、其身をおさむべし。……」

これは、この世の仕組みを理解することから、町人に生れた自分たちが幸せに生きるための「修身」を始めようというのである。ここで、如見は「五等の人倫」とよんで、次のようにまとめる。

- 第一 天子 ↓ 禁中様（天皇）
- 第二 諸侯 ↓ 大名衆
- 第三 卿大夫 ↓ 官位のある旗本・物頭
- 第四 士 ↓ 無官の諸旗本
- 第五 庶人 ↓ 四民 ① 士（諸国の諸侍） ② 農 ③ 工（諸職人） ④ 商（諸商人）

この五等と四民を如見は「天理自然の人倫」であり、先述の五等の人倫もこの四民あってこそ立ちいくのであって、世界万国どこであつても、この四民がない国はない。この世の成り立ちを「必然」として語りながら、注目されるのは、この工と商を合わせたものとして「町人」を提示し、この身分制度の中で「最下位」であることを積極的に受け入れる姿勢である。

いにしへは百姓より町人は下座げざなりといへども、いづ比ひよりか天下金銀てんかぎんづかひとなりて、天下の金銀財宝てんかぎんざいほうみな町人の方に主しゆどれる事にて、貴人の御前へも召出さるゝ事もあれば、いつとなく其品百姓の上にあるに似たり。況や百年以来は、天下静謐の御代なる故、儒者・医者・歌道者・茶湯ちやとう風流ふうりゆうの諸芸者、多くは町人の中より出来ることになりぬ。水は万物の下にありて万物をうるほし養へり。町人は四民の下に位して上五等の人倫に用あり。かゝる世に生れかゝる品に生れ相ぬるは、まことに身の幸にあらずや。下に居て上をしのがず、他の威勢あるを羨まず、簡略質素を守り、分際に安んじ、

牛は牛づれを楽みとせば、一生の楽み尽る事勿るべし。

どうだろうか。「下に居て上をしのがず」「羨まず」「簡略・

質素」「分際に安んじ」それが、町人である自分たちにとっての一生の楽しみ、つまり、一生を幸福に過ごす秘訣だというのだ。この「基本原理」のようなもの、この世間の「仕組み」のようなものは、ここにおかれるべくしておかれたと、理解しなければならぬ。この『町人囊』という啓蒙書の目的は町人にとつての「一生の楽しみ」とは何かを説くことであり、その「一生の楽しみ」を得るためには「分に安んずる」ことが何より大切だ、と教えていることになる。最下位の身分に安んずることがとかれているようで、「天下金銀づかひ」となった。「天下の金銀財宝みな町人」の管轄だ、とたたみかけ、儒者から諸芸道の堪能まで、諸道のチャンピオンたちは町人階級から輩出している。……自分たちを最下位に位置づける封建的身分制を完全に受け入れながら、社会全体を支える自負と、意気揚々「町人の天下」を謳歌するような気分の汪溢は、読む者をちよつと不思議な気分にする。西鶴の『日本永代蔵』巻一の「三浪風静かに神通丸」冒頭に大坂北浜の米市場の隆盛、莫大な

金額を一瞬で動かす——一刻のうちに五万貫目のたてりあきない——豪儀な商人たち。幕府がときおり、ピンボケた「改革」をうって、経済を死ぬほど凍り付かせたにもかかわらず、当時のエコノミーは基本的に健全で、それを握っていた商人たちは、自信にあふれていたのである。

筆者は、以前、「格差は社会の一体感を損なうか」でもこの問題について考えたことがある。四民平等を高らかに謳う、たとえば福沢諭吉の『学問のすゝめ』と、身分制をその社会を成り立たせる原理として、規定するこの『町人囊』の一部分は、全く逆の前提に基づいている。全く「逆の前提」であるとしても、実際にその信念と原理を体現するものたちの現実の世界における行動はほとんどかわらない。だから、人々は平等なのか、それとも身分差は絶対なのか、そんなことに考えをめぐらせても、あまり意味は無く、どちらかに仮に議論の決着をつけてみたところで、結局なにもかわらない。重要なのは、「金銀を主る」のは我々だという、自負をもつ彼らが、既に彼らが手にした「実権」を自覚し、それを行使し、「楽しむ」事なのである。

この「町人であることの自覚」と関わるのが、次のような一節である。

町人多く集りて咄ける中に、一人のいへるは、「侍の侍くさく、学者の学者くさく、味噌汁のみそくさきはわるし」といへば、一人の宿老のいへるは、「まことに左様にて侍り。去ながら町人は町人くさきこそよく侍るものを」といはれし。これもことほりなるかな。

町人は町人らしいのがいい、という以上に、ここではちよつと〈卑下慢〉めいた気分を読み取つてもいいだろうか。侍が侍くさければ、傲慢で鼻持ちならないかもしれない。学者が学者くさければ、術学的でいけ好かないと受けとめられるかもしれない。しかし、町人はいくら町人くさくても構わない。身分制の最下位に位置する町人は、根っから町人らしく、町人の「品位」<sup>しなぐらひ</sup>をわきまえて、その身分にふさわしく謙虚にひかえていればいい。経済的実権を握り、文化的に上昇気流に乗っている彼ら。彼らはまだ淀屋事件を経験していないのだ。

先ほど、西川如見が誇らかに謳つた、「町人が社会をうるおし、町人が社会を支えている」自覚は、西鶴の『日本

永代蔵』にその「写し絵」を見ることができ。町人によつて、当時の日本の巨大な経済は、すでに力強くまわりはじめている。「淀屋事件」以前のおおらかな空気のなかで、その経済的繁栄が、西鶴には「活写」され、如見には認識され分析されているのである。共通するテーマも少なくない。たとえば、

或人の云、「長者二代なしといふは、必ず一代にてほろぶるにはあらず。一生辛苦を積て漸く富といへども、子孫に至りぬれば、いつとなく花車風流に成行、驕る心出来て、財宝を費し失ふは、父の志をやぶりそなふ道理なれば、不孝の罪尤ふかし。家財は先祖より子孫栄久のために貯へ置れし物なれば、我身一分の栄花に費し失ふは大なる罪人なり。おのれまつたふして又我子に譲りあたふるは、先祖よりの預かり物を 又先祖にかへす道理あり。是孝行の第一なり。書経の無逸に、父母稼穡<sup>いさ</sup>に勤勞すれども、其子稼穡の艱難をしらず、乃逸<sup>いまいしつ</sup>して乃諺<sup>いまいまほ</sup>し既に誕<sup>いっほ</sup>る、とあり。いづれも先祖の質素管区をわすれて安楽放逸をこつとして、終に家業をやぶる事をいましめたり」とあり。

この段は、短めなので、全文を抜いてみた。だいたい全編このように「或人の云、……とあり」といった聞き書き形式で貫かれている。西川如見は「長者二代なし」という諺について、必ずしもそうなるわけではない、といいつつ、なぜそうなりがちなのか、を原理的に説明している、と言ってよいだろうか。たとえば、先にも挙げた西鶴の『永代蔵』巻一の三、「二代目に破る扇の風」は、その「二代目」にあたる「世伴」は親しいの孝行者であるばかりか、父親そっくりの始末屋で、「しわいせんさく」に明け暮れて、ますます身代を伸ばす。そう、「必ず一代にてほろぶるにはあらず」、その通り。しかし、この男は運の良いことに、あるいは運の悪いことに、わずか一分金を封入した、遊女に宛てた文を拾う。その遊女を捜し当てて渡してやろう、というつもりだったのだが、渡しそびれ、そこでふとぎざした浮気心、自分の金ではないのだから、この金を使って一生一度のお楽しみをしよう、などという気になったのが運の尽き。今まで近よりもしなかった遊女遊びの面白さに開眼。それが運の尽きとなって、四、五年でさしもの身代を使い潰したという。おもいもよらない成り行き。油断大敵

だ。そして、この一話がそっくり「鎌田屋のなにがし」が子どもにいましめとして語った内容である、とそうしてられている。ここでも、西鶴と如見は問題性の場を共有しており、同様の現実を見て、それぞれの言説を展開しているのである。如見は、先祖の創業の苦勞を子孫が理解せず、安逸にふけることから「長者に二代なし」といわれるような事象が起こると解き、西鶴は死後も父に孝行を尽くし、始末を事とし、家業に努めます身代を伸ばす「理想的」な息子も、ちょっとしたさもない心から魔が差したように、悪場所にはまってしまう。……西鶴は意外な展開と「心の隙間」といった実に人間的な要因から、この事象の「境界線」を押し広げているのだ。

『町人囊』には、如見が「文学論」らしきものを展開する一節もある。

「謡・平家・舞はいふに及ばず、浄瑠璃・小歌の類も、昔のは人の教戒共成べき事多かりし。時の盛衰、人の善悪を諷して、勸善懲惡の便とし、人の心をも和らげん為也。浄瑠璃は信長公時代より始り、義経のおもひ人、

浄瑠璃御前の事をつくりて音曲となせり。其後慶長の比よりこそ、西宮の傀儡子をかたらひて人形をまはさせたり。其比の浄瑠璃はみな義経記・平家物語・曾我物語の内をやつして、やさしき事おおかりしか共、近年の浄瑠璃といふものは、わけもなきはさらを第一とするゆへに、邪欲の媒と成て人をそこなへり。……」

このあと、浄瑠璃・歌舞伎の創始と発展について、かなり正確な物語を語っている。古い物は「其唱雅いづれも人の心を和らげ、世俗の教訓とも成べき事多し。童幼のはやり歌も、古のは物によそへて代を風したる事など有て、上つかたの人に心を付る類もありし。今の小歌は其すがた甚いやしく、其唱雅も筋なき徒事いたうらことにて、淫乱不道動の媒と成ものなれば、若き町人など、ゆめくもてあそぶふべからず」……これが結論部分。昔のものは、優雅でやさしく、いまどきの物は「甚いやしく」「筋もなき徒事」文学の役割を「勸善懲悪」「諷諫」ときめつけ、古は雅だが、今はいやしい、……下降史観と勸善懲悪的教訓のコンビネーション。もちろん、私たち文学研究者としては言い分はいくらでもあるのだが、この論のまとめると、当時としては

かなり正確な芸能史の把握も含めて、如見が学力の高い、優秀な人物であったことは否定しようがないだろう。整合的である、という意味ではすぐれた論といべきだ。その知識の範囲も、近世芸能史から、古今集仮名序に及び、それらをそこそこの確に理解しているのである。文学芸能や、酒色など、多面的で人と社会の本性に根ざす物事について、たとえば、『徒然草』と比較してみるのも面白い。とくに『徒然草』百七十五段の「世には心えぬことの多きなり」で始まる酒の是非をめぐる論は、冒頭からほとんど三分の二ぐらいまで、徹底的に、人を損なう、百害あつて一利もない酒という物について、批判を展開している。「かくうとましと思ふものなれど」であつさりと方向転換。「上戸は罪ゆるさるゝもの」などと、これも「あつさり」容認してしまふ。こと、日本社会においては、酒は人間関係の潤滑油のような所もあるのも確かだから。『徒然草』は教訓のために書かれたわけではない。その清濁併せのむ懐の深さといえるものが、『町人囊』の戒戒者にいわせると、『徒然草』がその読者を引きつける妙文によつて三百年來人を損なつてきた、ということになる。



現実には複雑な物だが、「教戒」は単純な方が受け入れられやすい。究極には「教育勅語」か、会津・日新館の「什の掟」のようになってしまふ。それは次のような物だ。

- 一、年長者のいふことはそむいてはなりません
  - 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
  - 一、虚言をいふ事はなりません
  - 一、卑怯な振る舞いをしてはなりません
  - 一、弱い者をいぢめてはなりません
  - 一、戸外でものを食てはなりません
  - 一、戸外で婦人と言葉を交えてはなりません
- ならぬものはならぬものです。

守るべき項目を挙げるなら、短ければ短い方が良い。「教戒」を目的としたために、如見の『町人囊』が単純なものになってしまい、そのために、『徒然草』を批判することになった。確かにそうなのだが、それを結論にたくはない。『町人囊』には、次のような一節もあるからである。

或人の云、「木の葉天狗とて、人毎に自慢せざるもの

はなしとなん。儒書にも、慢は損を招き、謙は益を受、これ天の道也、とあり。仏経にも、七慢の説あり。兎角自慢はさまぐありと見えたり。学問才智芸能に自慢するはよのつねの事也。こゝろ賢き人は、其慢心をふかく押へかくして外にあらはさずして、人に謙りうやくしくす。此故に慢心なきが如しといへども、底には慢心なきにあらず。又心浅く氣質軽浮なる物は心底にふかく蔵し置事あたはずして、慢心詞にあらはれ容に出で、人に忌憎まる。かたちにつよく見得て、心にはかるきあり、かたち謙りて内心に甚しく慢ある人もあり。何にても一芸ある人はかならず慢あり。又無芸無能にても慢ある者あり。氏系図を自慢し、分別を自慢し、達者を自慢し、財宝に自慢す。親類自慢・男自慢あり。これらの事もなく一文不通なる者は、又何の自慢する事かあらんとおもへば、是も自慢あり。不<sub>レ</sub>求、不<sub>レ</sub>貪、不<sub>レ</sub>諂、一心くといふて自慢す。これは一心自慢とやいはむ。形は随分謙て、内心人に傲気象ある者もあり。是を卑下慢といへり。此しなぐく町人にはとりわき多し。又故郷自慢あり。天竺は仏国にて、唯我独尊の大国、此他の国々は粟散国也、と自慢す。

唐土は聖人の国にて、天地の中国也、万国第一仁義の国、日月星辰も此国を第一と照し給ふ、といふて自慢す。又、日本は神国也、世界の東にありて日輪始て照し給ふ国にて、地霊に人神鳴り、万国第一の国にて金銀も多し。豊秋津国とも、中津国とも、浦安国ともいふなり、と自慢す。此三国に、おの／＼自慢あり。自慢によつて其国の作法政道立たり。又大なる自慢有。天地の間に生としいける物多し。其内に人を貴しとす。此故に人は天地の霊と号すといへり。誰か是をゆるして名付たるや。人間われとこれを名付たり。此自慢は人として一日もなくんば有べからず。たとへ貧賤乞食の身なりといふとも、麟鳳の貴きにもまされり。人の人たる義を自慢して、霊物の名をくだすべからずといへり。但かくいふ事も又自慢めかしければ」とて笑て止め。

右の一節は、この『町人囊』を解く鍵になる一節である。身分制度上の「分際」をわきまえて、「謙」であれと説くこの啓蒙教訓書なのだから、慢≠自慢はいうまでもなく戒めるべきことのはずだし、この一節もそのように語り始めている。「慢は損を招く」……そして私たち人間の中に潜

むあらゆる「慢」の様相を列挙し、その「慢」の癖を揶揄している内に、次第に論旨が裏返つてくる。「国」にも自慢がある。「自慢によつて其国の作法政道立たり」という。中国であれ天竺<sup>二</sup>であれその「自慢」は、つまりその国を誇ることは、その国を成り立たせる重要なものだ、といつてゐる。さらに万物の霊長である人間であることを誇るならどうか。身分制を受容して「分際」に安んずることを説いていたはずのこの『町人囊』全体のベクトルが、このフィルターを通して大きく展開する。

冒頭の第一節で見た、金銀を主る町人が、今この国を支え、他のすべての階層をうるおし支える根幹を成す存在になつている、今、町人の天下なのだ、とでも言い出しそうな行間のへまぼろし<sup>レ</sup>は幻ではなかつたのかもしれない。その逆転の仕掛けは、まるで数式のように、右に挙げた一節で機能し、この著作全体を「アクティベート」しているのかもしれない。自分たちの手に握つた強大な力を謳歌する町人たちは、この直後、淀屋事件に遭遇する。そこを生き残つた倉吉・淀屋（牧田氏）は、大坂にも返り咲き、この後ずつと生き延びるが、幕末討幕運動のさなか、明治新政府に全財産を寄付して消えた<sup>一</sup>、といわれている。

この「慢」のいましめがいましめではなく、この啓蒙教訓書に町人⇨商人たちの力の自覚と凱歌を鳴り響かせることで、歴史によつてはすぐ先に仕掛けられていた「淀屋事件」で挫折したとして、その挫折したはずのものが、これほど大きな歴史的な流れの中で敵討ちか因縁話のような「結末」を待ち得たとすれば、それはもはや理系だの文系だのといった問題ではない。たぶんそれは確かだ。

後注

- 1 若木太一氏ほか編。勉誠社より二〇一六年十二月刊。
- 2 『長崎先民伝』『徳川実紀』、また、『西川如見遺書』第1巻の「西川如見伝」など。とくに、『如見遺書』は国立国会図書館のデジタルライブラリーで見ることができる。死後家族がまとめたものだそうだから、信頼できる記事、といえるだろう。
- 3 “Better Angels of our Nature” by Steven Pinker 2012 Penguin Books
- 4 マーヴィン・ハリス著『食と文化の謎』2001岩波書店
- 5 茨木多左衛門は、貝原益軒・好古父子らの著書を独占的に蔵版し、西川如見のような一流の研究者による啓蒙書の出版を意欲的に手がける本屋である。
- 6 この「ぬげやすき」とは、教訓として庶民である読者に「通じやすい」わかりやすい」ことをいうか。
- 7 このあと、『町人囊』の引用は、『近世町人思想』（岩波日本思想大系新装版）によることとする。
- 8 「活水論文集」第六十号 2017年3月 「格差は社会の一体感を損なうか…『仮名手本忠臣蔵』の〈身分差〉が示すもの」は、『仮名手本忠臣蔵』の登場人物の分析から、この作品に、この仇討ち事件を単に武士だけの問題と捉えず、みずから賞賛すると共に、その「榮譽」の分け前を欲しがり、参加したがっている庶民の心を読み取ることが出来た。彼らは、「上昇志向」においてそれを求めるのであり、その憧れと欲求は、当時の身分社会を一つの価値観で、一体化させていたと言える、と考えた。
- 9 大坂の豪商、淀屋（岡本氏）の五代目廣當の時代に、奉公人の謀判に連座して闕所追放処分となった事件。庶民には、淀屋の大名貸と分不相応な贅沢がとがめられた、との見方が広まっていた。
- 10 「稼」は植える、「穡」は収めるの意味で、穀物の植え付けと穫り入れ、つまり農業の農業の労働のことだが、これは、辻原阮甫の『智恵鑑』（万治三年刊）に出てくる語彙。これは広く読まれた本で、大半が明の文学者馮夢竜の『智囊』による内容である。この『町人囊』の一節では、農業に従事する農民の辛苦、ではなくて、「創業」の艱難辛苦のことをいっている。

11 長谷川晃 「ひといき 私の独り言 明治維新を成功させ

た陰の力 : ある大坂豪商と京都の公家の話」 (Techno  
net (565), 16-21, 2014-07 大阪大学工業会)